

図書だより

＜第42号＞

平成14年11月15日

呉工業高等専門学校

図書委員会



「宮島 夕日の大鳥居」 撮影：呉高专写真部員

大鳥居の向こうに沈む美しい夕日を写真に撮る事ができました。

目 次

【巻頭文】

教科書のありがたさ校長 福 永 秀 春 ...2

【読書感想文&随想】

- 『ガンディー伝-偉大なる魂・非暴力の戦士』(前原政之著)を読んでC 1 川 端 要 ...3
『海狼伝』(白石一朗著)を読んでA 2 沖 本 千 織 ...4
『水滴』(目取真俊著)を読んでA 2 池 田 裕 貴 ...4
『キング牧師とマルコムX』(上坂昇著)を読んでC 3 上 田 奈 々 ...5
『その時歴史が動いた』(NHK取材班編)を読んでC 4 高 原 裕 一 ...6
『映画と本』A 5 増 平 翔 ...6
『木』(中本利夫著)を読んで専攻科 機械電気1年 三 輪 高 裕 ...7

【新任教職員の随想・私の薦める1冊】

- 『おさん』(山本周五郎著)一般科目(国語) 小助川 元 太 ...7
『青春を山に賭けて』(植村直巳著)一般科目(数学) 黒 川 康 宏 ...8
『白洲正子“ほんもの”の生活』(白洲正子著)一般科目(英語) 中 山 文 ...8
『EQ 心の知能指数』(ダニエル・ゴールマン著)一般科目(英語) 高 島 裕 臣 ...9
『チーズはここにあった!』(Victory Twenty-one著)機械工学科 吉 村 敏 彦 ...9
『モリー先生との火曜日』(ミッチ・アルボム著)電気情報工学科 井 上 浩 孝 ...10
『相手に「伝わる」話し方』(池上彰著)環境都市工学科 河 村 進 一 ...10
『自転車とまちづくり』(渡辺千賀恵著)環境都市工学科 山 岡 俊 一 ...11
『Minimum』(John Pawson著)建築学科 富 田 英 夫 ...11

【お知らせ】

- 1 図書館ホームページについて12
2 利用者用パソコンの更新について12
3 視聴覚資料ベスト1012

【編集後記】図書館長補 植 田 義 文 ...12

巻頭文

教科書のありがたさ

校長

福永秀春



今年8月31日付中国新聞に「読解力不足浮き彫り」の見出しで、広島県公立小中学校対象学力調査テストの結果が載っていた。その中で大へん気になるのが、国語の長文読解では小・中ともに正答率が29.9～40.5%と低いことである。とくに読解力が不足しているということである。同時に調べられた生活・学習実態調査の結果によると、月～金曜日に1日1～3時間テレビを見る生徒が小・中ともに40%にのぼり、さらに、毎日3～4時間テレビを見て過ごす生徒は小学生で21%、中学生で24%にのぼっている。また、中学生で1ヶ月に1冊も本を読まない生徒は35%、じつに3人に1人が本を読まないという。いわゆる活字離れの進行が著しい実態があると実感した。どうしたらいいんだと議論する前に、本校の学生諸君に言いたい。活字から離れて、すなわち、本から新しい知識を吸収しないで、将来技術者としての職業を持続することはできないので、極力活字に親しみなさい。また、読解力がないと、的確な仕事はできないので、とにかく本を読んで読解力を身につけなさい。それには、まず教科書を読みなさい。そして読み進むたびにハイライトを入れたり、書きこんだり、教科書を汚しなさい。この作業をすることによって文章が訴えている力点を見つけることができるのである。また、何よりも勉強した証拠ができて嬉しくなる。先日、3年、4年、5年生の授業参観に行ったとき、教科書にアンダーラインやハイライトはおろか書き込みも何もしていない学生を多数見たので、教科書を汚すことを説いた。重要な専門用語や大切な一文には自分なりのマークを入れたり書き込み、勉学の助けにすべきである。こうして教科書を試験勉強で読み返したり、演習を解くのに使ったりし

ていると、どこにどんな法則や公式が載っていたかが記憶に残る。このような所在を知っていることが本を読んだ者の特権なのである。卒業生に会うと彼らはよく述懐する。「先生、教科書に助けられます。何か課題があって考えるときは、昔習った教科書見るようになります、教科書はありがたいものです」と。つまり、会社の仕事上あるいは大学等での研究途上、新しい課題の解決をせまられたとき、これはあの原理を使えばよい、あるいはあの公式を使ってみようと思いついたとき、必ず還るのが学生時代に使った教科書なのである。一般に学習によって原理を理解していても、式など憶えておけるものではなく、まして、なんとかの定数値などなおさらのことである。その点若いうちに習った教科書というものは、ちゃんと憶えてくれているという安心感がある。これがノートでは、手書きしたものであるからどうも信頼感がなくて、教科書とか本とかの活字になった式なり定数なりを見つけるはめとなる。活字になったものはノートと違って何度と校正の機会を経るから、まあ、正しいと信じることになるのが普通である。主要な科目の教科書は卒業後も常にそばに置いて法則や公式の確認に必ず役立ててほしい。今のうちに教科書はしっかり読んでおかなければならない所以である。教科書のありがたさを感じるのは、卒業後のことであるが、専門の教科書を読むというくせをつけておくと、会社に行っても必要に応じて自分の習っていない専門分野でもスムーズに開拓できる。上司から言われた仕事に対し、私はそれを習っていませんからできませんとつっけんどんに言わなくてもすむのである。教科書をついでに参考書をしっかり読んで、自分の知識をそれらに預けておくとともに、新しい活字や本から新しい知識や技術を学びとる力を養ってほしい。そうすることが自信と気力を付けてくれるのである。

さて、今年9月広島県のある工業高校では、毎朝8時30分から8時40分までの10分間、読書タイムを設けて、760人の生徒と86人の教職員が一緒になって読書した結果、遅刻する生徒がうんと少なくなって、集中力ができ授業中生徒が静かになり、しかも昼休みに本を読むようになったそうである。

読書感想文&随想

ガンディー伝
偉大なる魂・非暴力の戦士
前原政之 著

環境都市工学科 1年

川 端 要



僕は、偉大なる魂・非暴力の戦士というガンディーの本を読みました。この本を読んでいろいろなことを学んだと思います。

一つは、時代によって、争う理由がかわってきているということです。他の国を支配しようという考えをもち、植民地にしようという考えが理由で戦争がおこったりしていたが、最近ではそうではないと思う。

二つめは、国とは、人だということです。たとえば、土地なんかをうばわれても、王様が誰であろうとも、国というものはあるんだということがわかりました。

三つめは、国を一つにまとめるということが、ものすごく難しいということです。ガンディーは、いろいろな方法でインドの人々の心をつなげていたと思います。自然のめぐみである「塩」を利用して「塩の行進」という行動に出たのは本当にすごいと思いました。その中でも心をつなげたもの、それは「非暴力」だと思います。ガンディーはどんなになぐられてもやりかえしたりはしませんでした。自分がもしこの時代にいたら、今みたいにちゃんと学校にも行けてないし、道徳というものを知らないだろうと思います。だから僕なら「非暴力」という考えは、わかってないんじゃないかって思います。だから、ガンディーはすごい人だと思います。そして、この「非暴力」というものは、どんなときでも大切なものだと思います。自分たちのクラスの中でも大事になると思います。ガンディーのような人がいればクラスはまとまっていくと思いました。人は一人では生きてはいけないからみんながいて、地球の上での集団生活の中で、ガンディーの考える「非暴力」が、大切なものなんだと思いました。

四つめは、宗教とは、大きな力をもっていると思いました。小さいころには、仏だんの前に座って祈ったりして、ほんとに意味があったりするのかなか思っていたりしたけど、ガンディーがだめなことをして、反省するために行った断食などをして、人の心を大きく動かしたりすることは、本当にすごいなと思いました。

五つめは、カースト制度というものが、どれだけひどいものかということがわかったような気がします。歴史の勉強で習ったときはこういうことがあったんだなと思ったただけだったけど、前よりくわしいことを知ったときはおどろきました。同じインド人でも、自分より下の身分は、認めてなかったのは、おかしいことだと思いました。別にインドの人でなくても、この制度があること自体おかしいし、ガンディーみたいに、それはおかしいよとどうどうと言える人があまりいなかったのが、少し残念でした。でも、ガンディーはすごい人だと思います。言いたいことを素直に言える人は、今の時代にそういるのかなと思いました。みんな口先だけで、何も行動にうつせないという人が多いと思う。自分もたぶん言える人ではないと思う。今、ガンディーのように言いたいことを素直にだれにも叫べるようになれば、この世の中も何かかわるんじゃないのかなと思いました。本当に人間は自分に素直でなく、うそが多いと思いました。

最後は、人が大きく変わるんだということです。ガンディーは小さなころはただ普通の青年でしかなかったし、イギリスに行って弁護士になっても、堂々と人の前で言いたいことが言えなくて、素直に言えない人だったけど、のちには、言いたいことがズバズバ言える素直で、偉大な人になりました。だから、自分の心の中の何か割れたとき、人が大きく変わる瞬間なんだなと思いました。

自分も、ガンディーみたいに言いたいことが素直に言え、人に何かを伝えられる偉大な人になりたいです。



海狼伝(第97回直木賞)

白石一郎 著

建築学科2年

沖本千織



家に芥川賞・直木賞を受賞した作品があるだろうと思い探してみると、父が買ったという海狼伝を見つけた。おもしろそうだったので買ったというこの本を父はまだ読んでいないそうだ。それなら私が先に読もうと、日ごろ戦国時代ものを読むことのない私が、海狼伝を読み始めた。村上水軍が登場するというのに興味がわいたから。瀬戸内に住んでいながらあまりよく知らなかったからだ。

対馬で海女たちの手伝いをしていた十八歳の笛太郎。李伏竜という宣略將軍のもとを訪れ、彼の右腕である金崎加兵衛の配下で通航中の商船を襲う「海賊」の仕事を行っていた。

だが、堺の商人船と対戦しており、海に落ちて、商人船を警護していた村上海賊衆に捕らえられた。瀬戸内まで連行され、その結果、笛太郎は村上水軍の將の息子であることが分かり、一族の能島小金吾に預けられた。そこで彼は水軍としての力量をのびしていった。織田信長の石山本願寺攻めに対抗して、大坂湾で織田水軍との海戦に加わった後、船つくりの名人小矢太と知り合い彼のつくった船で南蛮貿易の夢をはたすため出発した。

こんな話だったが私は能島小金吾という人物が好きにはなれなかった。世の中で一番大切なものは金銀。金銀が欲しいがために宣略將軍と対戦し、左の胸に石塊があたり死んだ。人は欲に目が眩むと無理なことでも実行してしまうのだろうか。欲深いというのはあまり感心できるものではないと思った。だが、商いに関しては、すばらしい才能があった。商人とのやりとりが巧妙というか、口がうまいというか…。今の時代にこんな人がいたらやり手の実業家になっていただろう。自分の得になる才能があることは良いことだと思う。現在では、資格をとることで自分の才能を他人に示すことができるのではないかと思う。資格をもっているかいないかでできる仕事は変わっているようで、私もできるだけ今やりたいことに必要な資格をとりたいと思っている。その

ためにはやっぱり勉強をしなくては…。

主人公の笛太郎は船が好きで男で、めずらしい船を見かけるたびに「どんなふうに進んでいくのだろう」と考えていた。船を見たり舵を取ったりするのを楽しんでいた。自分が楽しいと思うことをするのは苦にならないし、今でいうストレスもないのだろう。

この本の最後は、笛太郎が死んだ小金吾が変わって船大将となり、琉球・明国へ向かうとある場面で終わっている。夢に向かって進んでいくという場面で終わっているのは何かいいなと思った。

夢に向かっていくというのは、今の私にもあてはまるのではないだろうか。私も、この話でいう船を夢に向かって進んでいきたいと思う。

水滴(第117回芥川賞)

目取真俊 著

建築学科2年

池田裕貴



僕がこの本を読もうと思ったきっかけは、正直いって深い理由はなく図書館の検索コーナーで先生の配られたプリントの中からいくつか検索し、その中でその図書館にある物を二、三選択しました。それらの本の中で戦争の事が書いてあったので僕は、この「水滴」という本を読んでみようと思いました。

そして、その本を借りて帰ってみると、内容が僕が考えていたものとは違っていました。まず驚いたのは、主人公の足がある日突然大きくはれ上がり、そこから少しずつ垂れてくる水を求めて、毎晩戦争で傷ついた人達が主人公の元に集まってくるということでした。読んでいくうちに集まってくる人達がすでに戦争で死んでいたことが分かりました。ある人は片足を失っていたり、ある人は頭が落ちていたり、とても残酷なことが書かれていて、僕は、戦争のもたらした事がどんなに許せないか改めて痛感しました。さらに読み進んでいくと、主人公の世話をしていた人が、主人公の足から垂れてくる水を皮膚に塗るとたちまち髪の毛が生えてくることを知り、それを使い金儲け

を企みました。僕はこのところを読んでこういう悪事を働くところが人間のいけない所だと思いました。結局この水を塗っても生えてくるのは3日間ぐらいでそれ以降は、皮膚が荒れて、七〇歳代の肌になるらしく、金儲けはできませんでした。僕が一番感動したのは、水を求めてやってくる人達の中でかつて主人公と同じ部隊に所属していた青年がやってきた時の事です。主人公は、ケガをしてしまった青年を防空壕に置きざりにしてしまいました。その青年に対して抱く主人公の想いがとても細かく書かれていて、その青年が水を飲み終えると主人公に向かって深く礼をするという場面に込められた事を自分なりに考えてみて、青年や主人公の想いがひしひしと伝わってきたように思えます。また、僕は主人公の奥さんに対しても感動しました。夫が病気のにも関わらず、仕事をやりながらいっしょうけんめい夫の看病をしている姿に感動し、夫婦のきずなの深さというものを知りました。主人公が始めに病気になった時、色々な人がおみまいにきました。僕はその部分を読んでいて、主人公はとても人望が厚い人なんだなあと思いました。だから僕も、もっと人にやさしく接して、誰からも頼られる人間になりたいと思いました。最後に、何故「水滴」という題名なのか考えてみました。僕は、主人公がかつて犯してしまった罪や戦争に対する意識を忘れようとしているので、足にできた腫れ物で犠牲になった人々が、水の大切さや、戦争を二度と起こしてはならないということを伝えるために「水滴」というのが使われたのではないかと思った。僕も戦争のことは、そんなには知らないけど、経験したくはないし、これからも起きてはいけないと思うので、まずは、僕達が立派な大人になって二度と戦争が起こらないような、平和な世界を作っていきたいと思いました。

キング牧師とマルコムX

上坂 昇 著

環境都市工学科 3年

上田 奈々



私は前から黒人文化が好きで、音楽や洋服も黒

人を意識していた。それで、アメリカの人種問題にも関心をもつようになった。この本は、今なお続く黒人への偏見やスラム街に残る貧困層をこれから無くしていくために、もう一度二人の教えを見直そうというものである。私はキングの教えもマルコムの教えも深く理解していなかったのでこの本を読もうと思った。

まず、キングの教えは社会改革のための方法は愛と非暴力であり、白人を愛することが大切だと説いた。また、マルコムは白人を悪魔とみなし、白人が黒人の人としての権利をうばったとした。並べてみると、二人の考えが全然違う事がよく分かる。キングは統合を、マルコムは分離をはかっていた。

キングの教えは、たいていの人なら理解し納得することができると思う。でも実行するととなると、私なら無理だと思った。差別を受けながらもその人を憎まず愛せる事はなかなかできることではない。しかし、キングの「私には夢がある」の有名な演説はすばらしいと思った。肌の色でなく能力で判断するということを黒人にも白人にも教えたからだ。このようにキングは、黒人が愛と非暴力によって白人社会に統合するという思想で多くの国人の心をとらえた。

マルコムは、暴力肯定のイメージがあるが、これは誤解であった。暴力を否定してはいないが、肯定しているわけでもなかった。平和的解決ですめばすばらしいが、攻撃されれば必要ないかなる手段をとっても自身を守るべきだと言っている。このようなマルコムの少し大胆な発言を、最近の若者が暴力肯定にとらえて、マルコムブームを生んだのだと思う。また、音楽の世界ではヒップホップが優勢をほこり、白人に対する怒りや憎悪の感情をラップで表している。これは、攻撃的なマルコムの教えに近いように思える。私は、マルコムの教えこそ黒人の本音であると思う。私が黒人の立場なら、頭ではキングの教えのすばらしさを分かっているけど、実際はマルコムの方を支持してしまうと思うからだ。

キングとマルコムのおかげで白人との社会的な差はずいぶん縮まり、偏見をもつ人もずいぶん減っただろうが、白人の中には今も根強く黒人劣等の考えが残っている人もいます。しかし、日本の場合は白人と違って、黒人を軽視したりせず、むしろあこがれをもっている人が多い。これは、日本

でも最近になってヒップホップが広まり、街やショップにも黒人が増えてきたからだと思う。日本人の若者にとって黒人は、ファッションや音楽のお手本であり、あこがれなのだ。だからといって、黒人差別の問題に興味をもっている人は少ない気がするけど、そういう人たちにまず、ヒップホップの生まれた背景についてとか考えてほしいと思った。それから、今も残る差別をなくすためにも、キングやマルコムを正しく理解していったらいいと思った。そうすることで、黒人に対する差別をなくそうという動きがさらに大きくなるはずだと思った。

その時歴史が動いた

NHK取材班 編

環境都市工学科 4年

高原 裕一



今回、この欄に文を寄せる事になったのは全くの偶然である。昼食中に教官からいきなり、「書いてみないか」と言われ最初断ったが紆余曲折を経て書く運びとなった。

さて、書くとなったら本を選ばなければならない。家の近くにある図書館に行き、新着図書のコーナーに目をやった。そこで一冊の本を手にした。本の名は「その時歴史が動いた」である。この本の名を耳にして「あれっ？」と思った方もいるであろう。この本はNHKで放送されている同名の番組を編集したものである。なにげない気持ちで手にしたこの本であるが、この本の魅力に取りつかれるのにさほど時間はかからなかった。単純におもしろいのである。

この本は、時代の節目を生きた人物に焦点を当て、その人の生涯を紹介していくという内容である。月並みと言えば月並みかもしれないが、徹底した取材や膨大な資料に裏付けされた確かな情報、その分野を深く研究されている著名な先生による分かりやすい解説、更にその人物の心理状況なども詳しく解説され多くの知識を得る事ができた。

僕は歴史が好きであるからこの本に興味を感じ、楽しく読んだのかもしれない。しかし歴史は嫌いという人や、歴史の検証本は何か難しそうで読み

たくないという人にもぜひオススメしたい本である。いきなりこの本は読めないという方は、NHKで(多分)毎週水曜夜9時から放映されているのでそちらの番組を見てみればよい。その番組をおもしろいと感じたならば、次にこの本を手にとって読んでみればよい。日本の人物だけではなく海外の人物にも焦点を当てているので幅広い知識を得られるだろう。この本を読めば、きっとあなたの中の歴史が動くに違いない。

映画と本

建築学科 5年

増平 翔



僕は、最近よく本を読むようになりました。その本は、映画の小説版です。

僕は映画が好きで、1ヶ月に、1~2本は必ず見えています。映画を見ている時、登場人物の把握、心情、ストーリーの流れ等を考え、頭の中でいろいろ想像しながら見えています。映画を見ている時は、登場人物の感情は、説明されるわけではないので、いろいろと想像するわけですが、これが、一度見ただけでは全くわからないことが多々ありました。加えて、ストーリーに関して、何の前ぶれもなく突然始まり、ストーリーが理解できるのは、もう終わりになるころ、という時もありました。

ある時、本屋に行った時ある映画の小説版を見つけて、なんとなく買って読んでいました。その本は、映画と全く同じなんですが、映画は映像を通して、本は字を通して同じ作品を伝えているはずなのに、映画と本では全く違う感じをうけて、しかも、映画にはなかった部分や、細かい説明などがあり、より内容を理解しやすくなっていました。感情や情景、しぐさなども字でかかっているので、どんな状況なのか、想像しながら読んでみると、映画を見ているような感じを受けます。

それから、僕は映画を見るときは小説版も、一緒に読むようにしています。そして、いろいろな映画とその小説版を見ているうちに、映像には映像の、字には字のよさが、あるということを再認

識しました。みなさんも映画と本という組み合わせを一度は試してみてくださいはどうか？

私の薦める1冊

木

中本利夫 著

専攻科 機械電気1年

三輪 高裕



おさん

山本周五郎 著

一般科目(国語)

小助川 元太



私がこの本を選んだきっかけは、表紙の言葉に疑問を持ったからである。某ゲーム会社のコマーシャルに似たようなものであったが「植えて、育てて、伐る—そして植える」である。結果的に再び植えてはいるが、人間のエゴで木を伐採して自然破壊につながらないのかと不思議に思ったからである。

しかし、それは木についてまるで無知な素人の考えだった。果物に熟れる時期があるが、木にもそれがあのだと知った。生長が限界に達した熟し過ぎの林を過樹林というそうだが、生長が途中段階の木は光合成が活発であるのに対して、過樹林は光合成の能力が衰退し始めているので、そういった木を伐採し、また苗の状態から育てるのだという。そうすることで人間のためにもなり、地球のためにもなるというエコビジネスにもつながっているようだ。それを考えてもう一度表紙の言葉をみた時、ふと空き缶のリサイクルマークを一瞬連想した。自分の考えの都合のよさに気づきながらも、確かに地球に優しいのだと感心した。

一番驚いたことは、木は炭素を大量に蓄積しているということだった。植物は太陽光を浴びることで二酸化炭素を酸素に変える働きがあると中学の理科で習ったが、その作用があることを覚えただけで、この本を読むまで、「二酸化炭素が酸素になるのなら炭素はどこへいったのだろうか」と不思議に思わなかった自分を恥ずかしく思った。

この本を読んで、「木を伐採することは悪いことだ。」というのが間違った考えだということがよくわかった。木を切ったあとが大切なのだと。木を伐採したあとで植えないのが悪いことなのだ。著者は日本のメディアの誤解を招くような放送についても述べていたが、実際林業に携わっている人の考えを知ることができ、木について親しみと興味を持つようになった。

子供のころ、祖母と一緒に時代劇を見るのが好きだった。中村梅之助の『遠山の金さん』など、『仮面ライダー』を見るのと同じ感覚で見ている。ところが、最近は時代劇など見たことがないという学生が多い。勧善懲悪のワンパターンや古くさいイメージが、今の若者には受け入れ難いらしい。

時代劇といえば、今年の5月に藤原竜也と妻夫木聡という若手人気俳優二人が主演の『SABU〜さぶ』がテレビで放映された。他にも『かあちゃん』『どら平太』『雨あがる』など、最近はなぜか山本周五郎作品のドラマ化・映画化が多い。

ところで、周五郎作品には松平健演ずる『暴れん坊将軍』の吉宗のような、完全無欠のヒーローは登場しない。むしろ、主役の多くは運命に翻弄され、あるいは自分の持つ性癖から過ちを犯してしまうような人々である。周五郎はそんな愚かで弱い人間のドラマを、この上ない愛おしさを込めて描くのである。

十五年以上生きていれば、誰でも一度や二度は信頼していた人に裏切られたことがあるであろう。逆に、自分可愛さのあまり卑怯な道を選んでいた自分に気づき、愕然とした経験を持っている人もいるかもしれない。むしろ人に裏切られたときよりも、自分の汚い部分を見てしまったときの衝撃のほうが大きいのではないか。

そんな人にはぜひ、山本周五郎の作品を読んでもらいたい。たとえ人の心の頼み難さを思い知らされ、人間に絶望しかけていても、どこかで人の善なる部分を信じたい、いや、信じてよいいのだという気にさせてくれる。お薦めはいろいろとあるが、長編の苦手な人のために、まずは短編集『おさん』あたりがいいのではないかと思う。収録作品のほとんどが江戸時代を舞台にしたものなので抵抗があるかもしれないが、現代とは違い、いろいろな社会上の制約があった時代を舞台にしたからこそ、かえって生の人間の姿が浮き彫りになるのであろう。時代物だという理由だけで敬遠してしまうのはあまりにも惜しいのだ。

青春を山に賭けて

植村直己 著

一般科目 (数学)

黒川 康 宏



良い機会と思いますので1冊といわずお薦めの本を数冊挙げます。

1番のお薦めは、植村直己著「青春を山に賭けて」(文春文庫)です。内から湧き出るエネルギーに憑き動かされ、既存の枠にとらわれずに世界の山々を目指す過程で起こるハプニング、困難を克服するユニークな発想、そして人との出会いと別れが、飾らない言葉で素直に描かれています。早い話し珍道中ですが、そこには志高き目標があり常に前向きで謙虚、人に対する思いやりに溢れています。山はあくまでも舞台の一つにすぎません。読後はきっと著者の親しみを持って愛すべく人柄と行動力からパワーをもらえると思います。ちなみに植村直己は日本人初エベレスト登頂、世界初5大陸最高峰登頂、北極点単独行等の後アラスカの山で遭難して帰らぬ人となりました。

山、世界初と聞くと安易に出される言葉としていわゆる「冒険」があります。本物の冒険とは何でしょうか?本多勝一著「冒険と日本人」(朝日文庫)はそれを考えるきっかけを与えてくれます。

さて、学校でなぜ勉強しているのでしょうか?勉強して将来の役に立つのでしょうか?このような疑問を持っている人にお薦めしたいのは、広中平祐著「生きること 学ぶこと」(集英社文庫)です。世界を代表する数学者である著者が、若者へのメッセージとして明快に人生、学問論を語っています。元気をもたらす本です。

研究に疲れた時、迷いが生じた時にとっておきのお薦めの本、文句無しにおもしろい本があります。藤沢秀行、米長邦雄著「勝負の極北—なぜ戦い続けるのか—」(クレスト社)です。囲碁界、将棋界で頂点を極めた2人が人生を魅力的に語っています。破天荒な藤沢秀行の前では、迷いは痛快に吹っ飛んでしまうことでしょう。

以上、パワー本?をお薦めします。

白洲正子

“ほんもの”の生活

白洲正子 著

一般科目 (英語)

中山 文



初めて好きになった〈本〉のタイトルは、ムーミンの“オサビシヤマ”(?)であった。おそらく“お寂し山”だろう。ほのぼのとしたムーミンのイメージとはかけ離れ、物語はおどろおどろしい雰囲気に入れられ、たしかムーミンが「難事件(?)」を解決する、というストーリーだったように覚えている。なぜかこの〈本〉をひどく気に入った私にせがまれ、何人もの人が私に読んで聴かせてくれた幼少の頃の記憶が残っている。その後、〈松本清張〉などに私の嗜好が向いていくきっかけとなったのは、この〈本〉であった。

ある時、『白洲正子“ほんもの”の生活』に出会った。そのタイトルにある、“ほんもの”とは何か?この間に、白洲さんは次のように語る。「…はつきり言えるのは、私には自分が好きなものは実によくわかるということだけ。…どうしたら“もの”がわかるか、という質問に簡単に答えるとしたら…。まず長い間それと付き合うこと。人のものを見てばかり、人に訊いてばかりはダメ。自分が“もの”と付き合うこと。」

この本には、時代を経ても色褪せることのない「美」が収められている。時代に応じたさまざまな評価がなされるものの、〈作品〉は変わることなく、そこに存在する。「(古典)文学」を研究することも、何十年何百年と読み継がれる作品の〈不変性〉に触れることではないかと、ふと考えた。

白洲さんは、たくさんの“もの”の中から“ほんもの”、そして“自分の好きなもの”を見事に取り出していた。それは子供の頃から“いいもの”を見てきたおかげである、とも語っている。膨大な“もの”の中から何かを見抜く“目”は、今の時代に必要なものである。「なんでもいい」ではなく、「これがいい、これでないといけない」というものを、自分で探すことの意義、そのことを改めて考えるきっかけとなった一冊の本である。

EQ こころの知能指数

ダニエル・ゴールマン 著

一般科目(英語)

高島 裕 臣



チーズはここにあった!

Victory Twenty-one 著

機械工学科

吉村 敏彦



この夏、英語教育の学会で頻繁にとりあげられた問題がある。成績の絶対評価である。中学校ではすでに実施されており、「通知表が変わる!」とニュースにも取り上げられた。これは学力観を変えるターニングポイントとなるだろう。学力とは何か知りたくなった。気がつく、私は、一冊でなく二冊の本を買っていた。

1. ダニエル・ゴールマン

『EQ こころの知能指数』講談社+α文庫

かつて「できがよい」とは学校の成績の良さを指した。IQ的側面を示す指標と言える。ところがIQは人生での成功とはそれほど関係がないという。周囲とうまくやっていく能力や、感情を抑え冷静に自分のなすべきことを見極め実行する能力など、IQでは測れない能力が実は重要である。そのような能力を含めた心の充実度をEQと呼ぶのである。学力を超え、人間力とは何かという核心に迫るエキサイティングな一冊である。

2. 陰山英男『本当の学力をつける本』文藝春秋

EQ的側面よりもIQ的側面の重要性を訴える書物かと思ったが、そうではなかった。著者は現役の公立小学校教諭である。その学校は読み書き計算の基礎学習徹底と生活習慣確立をモットーとし、「ここを出た子は有名大学に受かる!」と話題である。現代では価値が多様化しており、大学合格は人生での成功度を測る指標として古典的である。しかし!読んでみて思ったのだが、この学校で真に重視されるのは学習成果だけではないようである。地域が、学校も親も子供も先生も一体となり豊かな教育を行っている。これこそが現代日本が失ったものだと思われた。重要なことは何かが見えてくる一冊といえる。

このように、一見相反する両者の奥底に、心の豊かさの重要性という共通のテーマを私は見た。読者諸君はどう思うだろうか。興味深いところである。

昨年「チーズはどこへ消えた?」という元はアメリカのビジネス書が、300万部以上売れたことは記憶に新しい。ネズミと小人が迷路でチーズを追い掛ける話であるが、「チーズ」とは「私たちが人生で求めるもの、つまり、仕事、家庭、財産、健康、精神的安定」を指し、「迷路」とは「チーズを追い求める場所、つまり、会社、地域社会、家庭」を指している。このパロディ本(経験談を押し付けがましく記述した自己啓発本は、おそらく入り辛い読者が多いのであろう)には、現代のビジネスマンが直面して困っている「状況への急激な変化にいかに対応すべきか」が書かれている。このようなベストセラーが出ると、二番煎じ本が発刊されるもので、「バターはどこへ溶けた?」という本が半年後に刊行された。「チーズ」が人生で求めるものを明確化し、それを得るため(成功するため)に変わらなければならないとしているのに対し、ことごとく反発し、変化に流されず自分らしさを大切にすることを示唆している。

この両者の自己変化の考え方に対して、中間的存在であると思われるのが、「チーズはここにあった!」というアリとキリギリスの知恵物語である。働きすぎで頑固者のアリと、遊びすぎでお調子者のキリギリスが、様々な経験をする。元々有名なイソップの「アリとキリギリスの物語」をもじったものであるが、本書を要約すると、「独り立ちの精神を養う、養えるように導いてあげる」ということになる。また、「チーズはどこへ消えた?」がビジネスマンの向けであるならば、本書は教育者の自己啓発書に相当するであろう。

現代人の活字離れが言われて久しい。1日の中で電車通勤等の時間がない人にとって、読書の時間を特別に割くことは難しいと思われるが、専門雑誌や論文を読む他に、気の利いた本をリラックスして読みたいものである。

モリー先生との火曜日

ミッチ・アルボム 著

電気情報工学科

井上 浩 孝



「ミッチ、私は死にかけているんだよ」

16年ぶりに再会した恩師、モリー・シュワルツ教授はALS（筋萎縮性側索硬化症）に侵されていた。忍び寄る死の影。「あと4か月か5か月かな」。だが、その顔には昔と変わらぬ笑顔があった。「この病気のおかげでいちばん教えられていることとは何か、教えてやろうか？」そして、老教授の生涯最後の授業が始まった――。

本書は、スポーツコラムニストとして活躍する著者ミッチ・アルボムとモリー教授が死の床で行った「ふたりだけの授業」の記録である。テーマは「人生の意味」について。愛、仕事、社会、家族、老いの恐怖、許し、そして死。毎週火曜日、飛行機に乗って700マイルも離れた恩師を自宅に見舞い、静かに対話を紡ぐ。売れっ子コラムニストとして多忙な日々を送る著者は、最初から「いい生徒」だったわけではない。彼の生きがいは仕事。時間に追われながら、何よりも立ち止まることを恐れるミッチ。そんなミッチも、死と対峙しながら最後の日々を心豊かに生きるモリーとの会話の中で、仕事よりも大事なことに気づいていく。

授業を重ねるたび、ミッチの心は揺らぎ、モリーの体は蝕まれていく。その様子が手にとるように伝わってくる。「いかに死ぬかを学べば、いかに生きるかも学べる」と、モリー。「人生に意味を与えられる道は、人を愛すること、自分の周囲の社会のために尽くすこと、自分に目的と意味を与えてくれるものを創り出すこと」

このエッセイ仕立ての講義録には読者の心を揺さぶる「宿題」が、たくさん詰まっている。あなた方は、ほんとうの先生を持ったことがあるだろうか？あなた方のことを、粗削りだが貴重なもの、英知をもって磨けばみごとに輝く宝石になると見てくれた人を。

相手に「伝わる」話し方

池上彰 著

環境都市工学科

河村 進 一



自分が考えていることを相手にいかにうまく伝えるか。コミュニケーションの基本ですが、なかなかうまくいきません。教育者として授業で、あるいは研究者として学会発表の場で、多くの人に向かって話すことを仕事に選んでしまってから、3年以上が過ぎましたがずっと考え続けていることです。最近買った本にも、「話し方」に関するものが何冊ありますが、この本はその中の1冊です。

著者の池上彰さんは、NHK報道局記者主幹という肩書きを持っていますが、NHKの土曜夕方の人気番組「週刊こどもニュース」のお父さん役と言えば知っている人も多いのではないのでしょうか。番組の中では、小学校高学年ぐらいの子供達に対して、お父さん役の池上さんがニュースの解説をするという「伝える」のが最も難しいと思われるニュース番組です。私はこの番組を良く見ていたので、書店でこの本を見つけた時、すぐに買いました。

この本には、池上さんがNHKに入局して（入社とは言わないらしい）から、松江、呉、東京での報道記者として、記者という立場からニュースを伝えるキャスターという仕事を通して、さらに子供向けニュース番組の担当という経験に基づいて得られた話し方についての考え方が書かれています。小学生に解説する究極のニュース番組を仕切っている人だけあり、本の内容も丁寧でわかりやすいものでした。読んでいて、自分が学生時代に、卒業研究の指導教授に「小学生にもわかるような説明をしろ！」と言われたことを思い出してしまいました。

皆さんは相手に「伝わる」話し方というものを意識したことがありますか。プレゼンテーションが苦手な人や人の前に立つとあがってしまう人に特におすすめの本です。

自転車とまちづくり

渡辺千賀恵 著

環境都市工学科

山岡 俊一



私は毎日、広にある高専宿舎から自転車で呉高専まで出勤している。車を持っていない私にとって、自転車は生活に欠かせない交通手段となっている。学生の皆さんも通学や買い物に行くときなど、手軽な交通手段として愛用していることでしょう。この自転車だが近年いろいろな面で注目されている。中でも特に注目されているのは、環境にやさしいクリーンな乗り物であるということである。自転車は自動車のようにガソリンを必要としないため、省エネでありCO₂等の排出量も削減できる。一方、悪い面では路上放置問題が挙げられる。特に鉄道駅周辺で多く見られ、各自治体でいろいろな対策をとっているものの、なかなか成果があがっていないのが現状である。

さて、このような自転車を取り巻く背景のもと、私の薦める「自転車とまちづくり」という本は、自転車の歴史や路上放置問題の現状とその先駆的対策事例、自転車をうまく使った商店街活性化の事例、世界の自転車事情などを紹介しながら自転車を活かしたまちづくりのための手法を探っている。同時に、我々に最も身近な交通手段である自転車が、利用方法によっては快適で、環境にやさしい都市づくりに貢献できることを伝えている。この本は、自転車交通を専門とする大学の先生が書いたものではあるが、学術的な内容ではない。ひょっとしたら2年生以下の学生には難しい箇所もあるかもしれないが、誰もが（どの学科の学生も）興味深く読むことができるであろう。歩いていけるような距離のコンビニにも自動車で行ってしまう現代人、これから免許を取ろうとしている若者にぜひ読んでいただきたい一冊である。

Minimum

John Pawson 著

建築学科

富田 英夫



ミニマムとは、それ以上、何か付加したり何か除去したりできない状態に到達していること。

自らの目指す「ミニマム」なデザイン像をそう確信するジョン・ポーソン (John Pawson) は1996年『minimum』(ミニマム)を著し、そのデザイン思想を世界に示した。折しもミニマルな建築・家具が流行していた当時の日本において、彼の思想・作品が多くのポーソン信者を生んだのは言うまでもない(著者もその一人である)。では、ポーソンの示した「ミニマム」とはいかなるものだったのか。

古代よりいわゆる建築書の多くが膨大なテキストにより構成されてきたのに対し、本書の大部分は、ポーソンが古今東西を問わず収集した「ミニマム」な写真と絵画(写真参照)から構成される。読者がこのイメージの束をめくり短い解説を読み進むうちに、脳の中に重層化された「ミニマム」のイメージが形成されるわけである。

彼の選んだイメージは、大平原、ダム、ブティックのインテリアなど多岐にわたるが、そこには一貫して、人間の作った「もの」の持つ美への深い洞察が伺える。それらは歴史的にはエコロジカルなデザイン思想の一端と捉えることもできるが、ものづくりを学ぶ我々はむしろ「もの」の持つシンプルな美しさと、美しい「もの」の背景にあるシンプルな思考をダイレクトに読み取ることができるのではないかと思う。建築学科の学生に限らず、ぜひ読んで欲しい一冊である。

最後にひとこと、僕はこの小さな美しい本が本当に好きだと付け加えておきたい。



お 知 ら せ

1. 図書館ホームページについて

図書館管理システムの更新により、次のページが新しくなりました。是非一度ご覧下さい。

OPAC	
検索条件	
検索対象	<input checked="" type="radio"/> 全て <input type="radio"/> 図書 <input type="radio"/> 雑誌 <input checked="" type="radio"/> 全て <input type="radio"/> 和書 <input type="radio"/> 洋書
検索条件	
書名 (TI)	<input type="text"/> AND <input type="text"/>
著者名 (AU)	<input type="text"/> AND <input type="text"/>
全ての項目 (FL)	<input type="text"/>
※必要であれば出版年の範囲を4桁の西暦で指定して下さい 出版年 <input type="text"/> ~ <input type="text"/>	
<input type="button" value="検索開始"/> <input type="button" value="条件クリア"/>	
1つのフィールドに複数個の単語を入力する場合は AND検索時... 日本*経済 のように “*” または “*” で連結して下さい 和書の場合は空白でも構いません OR検索時... 日本+経済 のように “+” または “+” で連結して下さい	

開館カレンダー						
2002年12月						
赤い表示が休館日です						
日	月	火	水	木	金	土
1 休館日	2 09:00~20:00	3 09:00~20:00	4 09:00~20:00	5 09:00~20:00	6 後期中間試験 時間割発表 09:00~20:00	7 10:00~15:30
8 休館日	9 09:00~20:00	10 09:00~20:00	11 09:00~20:00	12 09:00~20:00	13 09:00~20:00	14 10:00~15:30
15 休館日	16 09:00~20:00	17 09:00~20:00	18 09:00~20:00	19 09:00~20:00	20 09:00~20:00	21 休館日
22 休館日	23 09:00~20:00	24 09:00~20:00	25 09:00~20:00	26 09:00~20:00	27 09:00~20:00	28 休館日
29 休館日	30 休館日	31 休館日				

09:00~20:00 10:00~15:30 09:00~17:00

2. 利用者用パソコンの更新について

9月から利用者用パソコン5台を更新しました。利用方法は、情報センター個人領域の利用、インターネット、Word, Excel, PowerPoint, メール, CAD, CD-ROM (図書・雑誌の付録) などです。図書館開館中は利用できます (授業期の土曜日、試験期間中でも) のでどうぞご利用ください。

3. 視聴覚資料ベスト10

図書館には約350タイトルのDVDとLDがありますので、ご利用ください。最近利用が多かったものベスト10です。(2002年4月~9月まで)

1	ハリーポッターと賢者の石	6	アルマゲドン
2	13デイズ	7	リトルダンサー
3	パールハーバー	8	マトリックス
4	初恋のきた道	9	トラフィック
5	グリーンマイル	10	千と千尋の神隠し

編 集 後 記

最近、インターネット等の情報伝達手段が発達したためか図書の利用が減少傾向にある。これもアイコンなどの絵文字になれ、漢字などの活字が次第に敬遠される傾向なのかもしれない。象形文字を用いていたエジプト時代が想起される。図書だよりに、校長を始め新任の先生、また学生諸君から読書の大切さが紹介されている。新しいものを創造するためには論理立てた深い“思考回路”が必要であり、読書によりこの“回路”も育成することが出来ると思う。遠くエジプト時代にさかのぼらなくても、我々の先輩がよい言葉を遺されている。それを引用し、読書のありがたさを伝えたい。自非読萬巻書安得為千秋人…万巻の書をよむにあらざるよりは、いづくんぞ千秋の人たるをえん (吉田松陰)、古人のあとを求めず、古人の求めたるところを求めよ (松尾芭蕉)。みなさん、読書の秋です。若いうちに自分を支えてくれる本に出会って下さい。

(図書館長補 植田 義文)